

生活・文化と家政学

LIFE, CULTURE & HOME ECONOMICS

奥平 志づ江

1. 前 文

欧米では、HOME ECONOMICS の以前に、家政学を DOMESTIC SCIENCE といったことがある。これは、直訳すれば、家庭科学であるが、生活科学と訳されている。家庭を原点とする生活を科学的に研究する学問である。自然科学を含む学術文化の発展とともに、生活様式は変り、生活圏も広がるから、生活と文化の意味を探究することが、生活科学を理解し、家政学を考え直すことになると考えて、外来語と比較しながら考察を進める。

2. 生活とは

人が次々と世代に亘り生活環（ライフ・サイクル）を受け継いで種族を保存するためには、男女（複数）の共同生活（コミュニティー・ライフ）が欠かせない条件であり、単独では生命（ライフ）を遺伝できないことは自然の摂理である。「生活」とは「生存して活動すること」、即ち、生存（ライフ）＋活動（アクティビティー）と定義されている。その外に、暮らし（ライフ）、生き方又は生活様式（ライフ・スタイル）、生活状態又は条件（リビング・コンディション）の意味もある。

要するに、「生活」は一生（ア・ライフ）の営み、行為（ワーキング）である。「生活」と「ライフ」は前後に接続する単語によっても使い分けられる。例を挙げると、独身生活（シングル・ライフ）、社会生活（ソーシャルライフ）、家庭生活（ホーム・ライフ）、私生活（プライベート・ライフ）、都市生活（タウン・ライフ）、生活圏（ゾーン・オブ・

ライフ）等では「生活」＝「ライフ」であるが、生活機能（バイタル・ファンクションズ）、生活費（リビング・エクスペンス）、生活扶助（リブリフッド・アシスタンス）、生活環境（リビング・エンバironメント）、生活分野（カテゴリー・オブ・リビング）等では「ライフ」は使えない。つまり「生活」には「生と静」の意が弱く、「ライフ」には「活と動」の意味が薄いように感じる。因みに「ライフ・サイエンス」は生物学、医学、社会学等を包括する「生命科学」であり、「ドメスティック・サイエンス」は、家庭が生活の基盤（ホームベース）であるとの理由から「生活科学」と訳されたものと推察する。

3. 文化とは

人知が発達して世の中が開ける過程で得られる精神的所産を文化（カルチャー）、物質的所産によって生活が豊かになった状態を文明（シビリゼーション）と定義したり、文明は物質文明（マテリアル・シビリゼーション）と精神文明（モーラル・シビリゼーション）からなり、精神文明だけを特に文化と名付けたり、文化は文明開花（人知が開けて世の中が進歩すること）の略語であるとの説もある。何れにしても、物と心、器と技を分け難いように、文明と文化の別も判りにくい。平易に解釈すれば、生活のための知恵（技法）が文化であり、これによって得られた物で生活が豊かになった状態が文明であろう。具体的には、言語、学術、芸術、娯楽、宗教、道徳、風俗等のソフトな所産を文化と言ひ、機器、建造物、交通機関等のハードな所産で生活が豊かになった状態が文明

と考えられる。文化の筆頭である言語は、共同生活に欠かせない意志伝達のための通信手段であり、他の文化の推進役として位置づけられている。

文明と文化の形容詞的用例で、物質的に生活水準の高い人や国を「文明人」、「文明国」又は「先進国」といい、或る程度 of 生活水準で、徳操（教養）を備えた人や国を「文化人」、「文化国家」というように、文明と文化は対称的に使われることが多い。文明の響きからは硬い鎚音が聞こえ、文化の香りからは芳香を感じるとの例がある。然し、肉体と遊離した精神や、経済を無視した生活が考えられないように、文明と文化の明かな区別は無理である。生活は「生きている間のすべての営み」で、文化は「生活を守り、豊かにするための工夫の結果、得られた精神的所産」と解釈したが、生活圏（縄張り）を守るための集団相互の争いや、「いじめ」、「差別」等によってもたらされる悪の所産（不和）は文化といえるだろうか。言葉を変えれば「戦の文化」はあるのかということである。このような悪計も生活行為であるが、共同生活の理念である「助け合い」に反するものであるから「必要悪」といい、判断しにくい場合は競争（レース）と見る人もある。速さ、強さ、技を競い合うスポーツは娯楽や祭典に近い遊技（ゲーム）で体育文化といわれるが、不正の手段を用いた場合は、醜い争いや賭博になるから文化とはいえない。矢張り、お互いの心や体を傷つける結果をもたらす生活行為は文化とは認められないようである。これに対し、争いの原因をただして、争いを未然に防ぐ平和論や、戦争の状態を記録する歴史等は文化と位置づけられる。最近では、職業、奉仕等の社会生活とは逆に、レジャー（余暇）パカンス（休暇）、レクリエーション（休養、娯楽）の取り方、過し方等の生活方法も重要な文化と認識されるようになった。とにかく、文化は生活から生まれるものであるから、時間的（伝統と現代）、空間的（生活圏）生活状態の変化に応じて拡がることを理解した。

最近、アフリカ、中東、東南アジアの孤児救済

に、養子縁組みなどで素早い対応を見せるアメリカ人が多いことを知って、庶民文化の水準の高さを感じた。なお、生活と文化を究明するには、アラスカのエスキモー、カナダのヘア・インディアン、アマゾンの原住民、アフリカの低開発地域等、僻地の住民の生活習慣（風俗文化）についても研究する必要がある。

4. 家政学について

国を治めることが国政であり、家を治めることが家政である。国際関係を抜きにしては国の政治が運営されなくなったように、家政もグローバルな思考をしなければ成り立たなくなったといっても誇張ではない。これは交通機関の発達と経済の発展に伴う人的、物的交流と生活圏の拡大によるライフ・スタイルの変化があるからである。前稿で「家政学の発展の歴史は民主主義発展の歴史であり、端的には女性開放の歴史である」と述べた。

家政を専ら主婦の責任と考え、女子専科の閉鎖的な教育として発足した家政科教育であるが、民主化とともに、家政を男女平等の責任と捉え、家庭電気機器の普及と産業構造の変革による手作りの家内産業が衰退して家事も省力化された結果、女子の社会進出は急速に進み、家計の社会への依存度も増大して消費経済の質的変革を来たし、経済力の向上によって生活の余裕が生まれ、余暇を楽しみ、海外迄も生活圏が広がってゆく情勢では、家政科教育の教科内容も社会化、国際化して男子にも開かれた教育に移行してゆくのは自然の成り行きであろう。このような家政科教育の様変りにかかわらず、家庭の価値が見直され、家庭生活の社会生活（職場）に対するウエイト（比重）が特に青年層で増しつつあることは最近のアンケートによって裏書きされている。生活を「一生のすべての営み」と解釈すれば、その中に社会生活、活動も含まれることは別に新しい思考には当たらないし、生活圏の拡大も「生活」の意義を変えることにはならない。又、家庭が安息の場であることに変わりはないが、最近まで今日の日覚ましい女性の社会

進出を予想し得なかったために、未だに生活の意義と家政科教育の実態を錯覚している人がいることも事実である。家政科教育の目的が家庭管理、家族関係、保育に重点を置いて、家庭生活の物、心両面に亘る向上を図ることに加えて、社会人、国際人としての知識・教養を与える程に広がったことは常識である。又、一方で生活科学と考えれば、教科内容が広汎な生活全般に拡散して重点が呆けたり、反対に衣、食、住の生活技術を昔に戻って職業専門的のレベルまで教育するのでは、との懸念が残り、文化教育と見れば、課外のクラブ活動、文化サークル活動、伝統文化、外国文化を含む広汎な文化教育を教育科目に組み込まれるような杞憂を抱く向きもある。家政科教育の教科目と内容に関する評論は前稿で述べたので割愛するが、家政の名を変えなくても教科内容は時代と共に変更、修正されるべきものであり、絶えず変っていることも事実である。

5. 後 文

以上は言語の意義の解明と比較文化論に偏り過ぎた感じであるが、西欧で家政学の名称が、古くは、オイコノミヤ（家庭経済）に始まって、ハウスホールド・アーツ（家政術）、ハウスホールド・マネージメント（家庭経営又は家庭管理）、ドメステック・サイエンス（生活科学）、ホーム・エコノ

ミックス（家庭経済学）と変っても、家庭の語が温存され、日本では依然として「家政学」と訳されて今日に至ったことに重大な意義を感じたために、生活と文化の意味から家政学にアプローチすることを試みたわけである。又、医・食同源といわれるように、文明と文化、生活と文化、家庭と経済は同源と理解したからでもある。「経済」の意味は元来、「節約・抑制」と「資源の有効利用」であり、「THE ECONOMY OF NATURE」は「自然の法則、無駄のない運行」を意味し、キリスト教では天の摂理（生活環と道徳）を「クリスチャン・エコノミー」ということを知ったのは研究の成果であった。又、英語では今でも、人間や人をMAN(男)、家長（世帯主）をMASTER OF HOUSE USE、主婦をHOUSE WIFEと呼んでいることから、時代が変っても名称、呼称にこだわることはないと感じるようになった。

参考文献

- 新和英辞典、新英和辞典 研究社出版
- 家庭科学研究#180 ライオン科庭科学研究所
- 生活者宣言 生命保険文化センター
- 「家政学と家庭」家政研究19号 奥平志づ江
- 広辞苑第三版 岩波書店（1990年版）